

P07b **Physical relation between Orion-IRc2 and the radio source " I "**

奥村真一郎 (日本スペースガード協会)、山下卓也 (国立天文台)、酒向重行、宮田隆志 (東京大)、  
本田充彦 (神奈川大)、片ざ宏一 (JAXA)、岡本美子 (茨城大)

赤外線観測による Orion BN/KL 天体の発見以降、Orion KL 領域においては赤外線源 IRc2 がエネルギー源の大部分を担っているとかつては考えられていた。その後 1990 年代には電波の連続波観測により、IRc2 の位置に電波源 " I " が発見されるが、電波源 " I " は IRc2 と約 1 秒角オフセットのあること、SiO メーザーや水メーザーが IRc2 ではなく電波源 " I " の近くに分布することなどが明らかとなった。電波源 " I " の位置には近赤外、中間赤外で対応する天体は未だ見つかっていないものの、現在では IRc2 ではなく電波源 " I " にこそ主となるエネルギー源が存在する可能性が高いと考えられるようになった。

すばる望遠鏡での観測データから求めた IRc2 周辺の  $7.8 \mu\text{m}/12.4 \mu\text{m}$  色温度分布の考察より、IRc2 から電波源 " I " に向かって温度勾配があり、電波源 " I " の位置に色温度のピークがあることが明らかとなった。従って、KL 領域、とりわけ IRc2 周辺における主なエネルギー源は IRc2 でなく電波源 " I " (に存在する原始星) であると考えるのが自然である (2005 年春季年会、奥村他)。

過去の近赤外観測における測光、位置データと比較することにより IRc2 の本質、電波源 " I " との物理的な関係についての議論をさらに進展させることができたので、今回の発表ではその結果について報告する。